
昔話に役立つ思い出作りを

花澤 文化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔話に役立つ思い出作りを

【Nコード】

N8339L

【作者名】

花澤 文化

【あらすじ】

僕、吉井太一は高校デビューを果たした。

中学校の自分とはおさらば。というわけで図書部というものに入ってみたんだ。まあ・・・それが間違いだったのかもしれない。

呪われた図書部？そんなバカな。

学校七不思議？信じない信じない。

でも実際におこってしまった。混乱を巻き起こす不思議なことが。。

プロローグ 高校デビュー

高校デビュー

普通にある、聞き慣れたとまではいかないがよく聞く言葉だと僕は思う。僕はその高校デビューとやらを果たしたのである。すなわち中学校とはまったくの別人。性格も見た目も何もかも変えた。しかし今は高校生。学ランなので服は変えようがない。髪とか少し伸ばしてみた。黒髪でところどころ跳ねてるけど。癖があるのだ。軽い癖のある毛。身長も変えれない。160後半ぐらいだ。

いじめ

とはちょっと違つかもしれない。僕が自分から進んでその位置にいたのだ。いじめではなく究極的なマゾと思われるぐらいだろう。中学校の頃、僕はいじめられていた。自らの意思で。理由は言えない。言いたくないし、思い出したくもない。

自らいじめられてた人間がなぜ高校デビューをしたのか

僕はいじめられているということについては何も思わない。でもそれでまわりが同情してくるのが気に食わなかった。確かに同情してくれるということは優しいということなのかもしれない。でも優し

いということとは同情するということじゃない。矛盾してるかもしれないが優しいなら………

助ければいいだろう。

そんなのアニメや漫画、ドラマの中だけだって分かってる。助けるとか助けないとかにこだわるのは幼稚なことかもしれない。でも僕はその時、世界の全てが見えたような気がして絶望したのだ。

まあ、僕が高校デビューした理由なんて曖昧ぐらいがちょうどいい。とりあえずいじめられてた自分が許せない程度に考えてほしい。

だから僕は中学校から離れた高校に進学した。引越もしなくちゃいけないって一人暮らし。大変だけれど同じ中学のやつは一人もいなかった。幸い。

言い忘れていたが僕は今登校中。

高校の入学式からはやくも2週間。まだクラスには馴染めていないが、高校デビューしたのだ。自己紹介でダジャレも言った。そのうちいろんな人と仲良くなれるだろう。

「えーっと、今日の提出物は………」

僕は席に着き、提出物を確認する。忘れ物はなし！ああ、そういえば部活も決めなきゃいけないんだっけ？何の部活に入るのかはもう決めてある。

「よお、確か吉本だったっけ？」

急に話しかけられた。僕は確かに吉本。吉本よしもとたいち太一だ。

「えっとそういう君は金本かねもとせとや元也君だよね」

「君付けはやめろよ。呼び捨てでいい」

金本君……じゃなくて金本は確か中学でも人気があったほうらしい。ツンツン頭の黒髪で、制服も崩して着てる。親しみやすいやつだった。身長は170越えはしてるな。成長の止まった僕とは大違いだ。

「お前何部に入るんだ？」

「金本は？」

「俺はサッカー部だな」

質問返しにも関わらず快く答えてくれた。

「僕は図書部かな？」

読書は好きではないが苦痛ではない。むしろスポーツのほうが苦痛な僕は図書部がちょうどいい。ん？金本の様子がおかしい。震えるように見える。

「お、お前……図書部に入るのか？」

「うん。スポーツ全般苦手だし。読書は苦にならないから」

「そ、そうか。お前は<勇者>だったんだな。お前と友達になれて嬉しいよ」

「はい？ま……どうも」

一回だけしか話してないのに友達になつたらしい。それは僕としても嬉しい限りだが、あの反応はなんだつたのだろうか？勇者？まあ、いいや。

そんな感じで今日は金本と過ごした。といつても休み時間とかにだけ。

○

放課後。僕は入部届けを出そうと席を立った。金本はサッカー部の人ともう提出しにいった。すると僕の方に向かって女の子が歩いてきた。茶髪でロングの髪。身長は150後半。でもギャルっぽい感じはしない。たぶん茶髪は地毛なのだろう。そしてすごくきれいだ。いや可愛いと言った方がいいだろう。

うちの高校は男子学ラン、女子はセーラー服だ。そのセーラー服がファッションのように見える。

「あんた、図書部に入るんでしょ」

「え？まあ、そうだけど」

その女の子は僕にそう話しかけてきた。僕は一番無難な言葉を選んで言った。

「私も図書部なの。行きましょ」

「え？ああ、うん」

行きましょとは入部届けを一緒に出しに行こうという意味だよな。

重要なことが抜けている感じだった。主語とかね。

僕たちは教室を出て、廊下を歩いてきた。向かっているのは職員室。そして僕の隣には女の子。確か、同じクラスこがえみの古河江実。自己紹介の時に可愛い人だと思っていたから覚えていた。不純なことだろうが関係ない。

「えっと、古河さんも図書部なの？」

「さっきそう言ったでしょ。吉本くん」

名前を覚えられていた。やはりダジャレを言ったおかげか。

「あんな寒いダジャレ言われたら名前だって覚えるわよ」

もうダジャレは封印しよう。

「やっぱり他人みたいで嫌。私のこと名前で呼んで。私もあなたの

こと名前で呼ぶから」

「え？ああ、うん」

こんな返事しか返せない。「もちろん呼び捨てね」と念を押してくる。笑顔もまた可愛い人だった。

僕らは顧問なのの七先生に入部届けを渡して、さっそく図書室へ行く。

「えっと、江実、なんで図書部に入ったんだ？」

「そんなの決まってるじゃない。不思議を解き明かすためよ！」

「不思議？」

何か気になる推理小説でもあるのだろうか？まあ、なんにせよ仲良くなれそうな感じだと思った。

ガラガラ

「失礼します」

江実がなにも言わないので、僕が一人であいさつする。すると中にはすでに4人の人がいた。

「よおつす」

「こんにちわー」

「こんにちわ・・・」

「・・・」

なんともあいさつで特徴が分かる4人だった。

「こんにちわ」

「・・・」

江実もだんまり。こういうのは苦手なのかもしれない。僕だって好きな方ではないけれど。

「えっと、先輩方ですか？」

「ううん。俺らも一年生だ」

「え？先輩方は？」

「いないぞ」

親しみやすそうな金髪くん。背は高くて180はあるんじゃないだ

ろうか。金髪なだけで別に不良というわけではないようだ。整った顔立ちをしている。

「どういうことですか？」

「先輩たちは去年で卒業したんだよ」

今僕に話してくれたのは髪が短くて黒髪。背も高くて170はある。スポーツ万能そうな感じの女の子だった。なぜ図書部にいるんだろう。

「ってことは去年新入生が誰も入らなかったんですか？」

「その通りです・・・」

すごく内気そうな女の子が話してくれた。短いツインテールで黒髪。大人しそうな感じだけど可愛い女の子だった。

「・・・・・・・・・・」

さつきからしゃべらない黒ぶち眼鏡。スポーツができるというより勉強ができるって感じの見た目。顔はかっこいいし、髪もきれいな黒髪。何がいけないんだろうかと思っただら・・・

萌え本。

読んでる本だった。

「まあ、自己紹介しようか」

と金髪。

「まずは俺からだな。俺は大和健。やまとたける 1年8組だ」

金髪の名前は健というらしい。金髪はなんとなく染めてみたそうだ。

「あたしは小高真織。こたかまおり 1年7組」

スポーツ少女は真織というらしい。なんで運動部に入らないのか聞いたら不思議に興味があるそうだ。
じゃあ、オカルト研究会に行けよ。

「えっと……丘波朝居。おきなみあさい 1年3組」

大人しい少女は朝居。読書が好きなさうな。でも他にも理由があるらしい。

「僕は吉井太一。よろしく」

「私は古河江実。よろしく」

僕らも無難にあいさつする。残りは……………

「俺は神木海斗。かみきかいと」

すぐくぶつきらぼつだ。そういう性格らしいからしょうがないけど……。

「じゃあ、俺たちは名前呼び合うことにしようぜ！同じメンバーだしな！」

「うんいいよー」

「うん……………」

「僕もいいと思う」

「私もそれでいいわ」
「.....」

だんまりはよそうよ！

「海斗、どうした？」

・ 金髪.....じゃなかった。健は海斗にそう聞いた。すると.....

「3次元ごときが、俺を名前で呼ぶな。名前で呼んでいいのはラスカちゃんだけだ」

図書室が凍りつきましたとき。

プロローグ 高校デビュー（後書き）

初めのプロローグなのに長くなりました。

どうも花澤文化です。

この作品をどうかよろしく願います。

開始の合図1〜嘘のような現実〜

こんにちわ、吉井太一です。図書部に入ったはいいいんですが個人的な人が多すぎます。大変です。というかみんな読書しないのに図書室来てるんだよね。どうしてだか聞いてみるか。

「江実、なんで図書部に入ったんだ？」

ちよつと質問を変えてみた。僕が今質問したのは茶髪のロングの少女、古河江実^{こがえみ}。同じクラスなので話しやすい。

「そんなの七不思議にきまつてるじゃない」

あっさりと言いやがった。七不思議？この学校にもそんなものあるのか。

「そんなものどうせ迷信だろ。僕は信じない」

「私もそうだと思ったんだけどさー。こんなうわさがあるのよね・・・」

「図書部には4年に一回、不思議なことがおこる・・・でしょ」

それを言ったのは小高真織^{こたかまおり}。スポーツ少女って感じなのになぜか図書部に。

「私もそれに興味あってこの部活に入ったんだよねー」

「真織さんもか・・・」

「呼び捨てでいいよー」

正直僕はげんなりしていた。んなもん信じてる奴が2人もいる部活理由が不純すぎる。

「俺もそれ目的だよ」

金髪の大和健^{やまごたける}。この人は明らか読書って感じじゃないもんね。

「ええ！？七不思議なんてあるんですか！？そんな・・・怖いです・・・」

このすぐく内気な少女は丘波朝居^{おかなみあさい}。黒髪のツインテール。朝居は知らなかったみたいだ。よかった読書目的な人がいて。そしてもう一つ・・・

「・・・・・・・・」

こいつも読書目的だろう。読んでる本はすごい本だがちゃんと読書はしている。反応がないからさっぱりわからないけれど。このだんまりオタク少年は神木海斗^{かみきかいと}。

「そんなの噂だろう。僕は信じない」

「今年がその4年目なの。ふふふ、太一が認めるのも時間の問題ね」

「江実、僕はこう見えて現実主義者だぞ」

「そうなの！？」

「真織！？その反応はひどくない！？」

なんか僕がいじめられてる構図になっていた。どういふことやねん。

「海斗と朝居もそういうの信じるか？」

僕は気になったので2人に話を振ってみる。

「いえ・・・私は太一くんと同じなんですけど・・・ちょっと怖い
です」

「2次元ならありえるかもな。3次元でその可能性は低い。だがそ
の噂、俺も聞いたことがある」

「朝居もか。ん？お前もしってたの？」

「まあな」

なんだかんだでほとんどのやつが七不思議目当てっぽかった。

「七不思議・・・ねえ・・・」

僕は信じないさ。そんなもの絶対に。現実主義者ってのは頑固なん
だ。でも僕は思い知らされることになる・・・七不思議のことで
・・・。

○

「おつす、金本」

「おお、吉井か」

こいつは金本。クラスでの友達。

「もしかしてお前の勇者発言、七不思議に関係してる？」

「そうだが。だってそんな危ないところに自ら入部するなんて勇者

意外にだれがいる」

「僕のほかに5人いたぞ」

そんな会話をしていた。このときの金本は普通だった。いや、僕が普通じゃなくなったのか。

○

「いやー、読書疲れたー」

「真織って見た目からしてスポーツにむいてそうだしな」

「いや、私、スポーツだめなの」

「マジで!？」

なんて会話を真織としていた。他のメンバーはまだこない。まあ、先輩もいないし自由だからな。いつこようがいいわけだ。

「みんな遅いねー」

「うん、まったくそうだな」

ガラッ

「お、誰だ？」

「俺だ」

「海斗か。他の皆は？」

「しらん。俺にきくな」

そして俺は海斗に投げかけたかった疑問を口にする。

「いつも海斗が読んでる本っておもしろいの？」

「は？」

「いや、何か面白いのかなーと思って」

なんか機嫌悪くした？なぜだろう、何か悪いことでも言ったかな？

「何か機嫌悪くしたならあやま……」

「この本の面白さと言ったらまずはこのヒロインの可愛さだろう。

まあ、その可愛さが無駄にならないぐらいのストーリーの面白さもあるわけだが。まあ、面白いか面白くないかで言えば面白い方に分類されると思う。この伏線回収の技術なんてすばらしいものでそこらへんの素人ではマネできないものだろうな。さらに言えば……」

機嫌よくなってるがな。そんな好きなんすね、その本。

ガラッ

「大変だよ！太一！」

叫びながらこっちにむかってきたのは江実だった。

「どうしたんだ？腹でも壊したか？」

「違うよ！みんなに私たちが見えてないの！」

「は？」

意味がわからない。見えてない？何言ってるんだ？

「よっしゃー！七不思議始動だーっ！」

「真織！？そんな場合じゃないよ！」

「くだらない・・・」

そして僕は気になったことがあったので聞いてみた。

「私たちってお前だけじゃないのか？」

「健もそうだったの。ってことは図書部全員見えなくなってるでしょ！」

無茶苦茶な理由だった。

「ちょっと待ってる。僕が確認しに行ってくる」

「どこにいくの？」

「いいから待ってる」

僕は図書室を出て走り出した。

○

「見つけた・・・はあ・・・はあ・・・」

僕は水飲み場の近くで金本を見つけた。こいつに聞くのがいいだろう。こいつは図書部の七不思議について知ってたし、僕、見える？なんて質問してもおかしい人だとは思われまい。

「おい、金本！今部活中か？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

こんどはもっと近づく。というか耳元で叫んでやる。

「金本――！！！！！！！！！！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・？

考えたくない。考えたくないけど。。。

すると金本はこっちにむかってきた。あれ？これもしかして気づいてないふりかな？まさかビビらそうとしてるのかも！ふふふ、そうはいかない！僕だって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

驚愕した。

金本は僕の体をすり抜けていったのだ。これは相手に見えないどころじゃない。存在自体が消えかかっているというこの方がしくりくる感じだった。

「う・・・・・・・・ウソだろ・・・・・・・・」

七不思議最初の第一不思議『オールカラー透明全色』編が開始した合図でもあった。

開始の合図〜嘘のような現実〜(後書き)

数えると第2話ですね。

なんかプロローグよりも短い本編。
ていうかプロローグが長すぎました。

でわ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339/>

昔話に役立つ思い出作りを

2010年10月8日11時48分発行